

〈原著論文〉

コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思い

Thoughts of Nursing Students before Graduation who Experienced Alternative Practice during the Covid-19 Pandemic

谷地 季子¹, 山本 純子², 登喜 和江³, 山本 直美⁴

要旨

コロナ禍において代替実習を経験し卒業する学生たちが、何を考え感じているのか、その思いを明らかにすることを目的に、2022年3月に卒業を予定している看護系大学の学生9名に半構造化面接を実施し、質的記述的方法で分析を行った。結果、コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思いとして、〈不安と残念さ〉〈揺らぎ〉〈できた感と強み〉〈自分を鼓舞する〉の4カテゴリ、14サブカテゴリが抽出された。学生は、不安感や不全感を抱えながらも、ネガティブな思いとポジティブな思いが交差する中で、自分自身を励まし、認め、一歩先に踏み出す準備を進めていた。

キーワード：新型コロナウイルス感染症, 看護学実習, 代替実習, 看護学生, 思い

Covid-19, Nursing practice, Alternative practice, Nursing students, Thoughts

I. 緒言

2020年2月以降、新型コロナウイルス感染症(以下、Covid-19)の急速な感染拡大、医療提供体制の混乱、ワクチン接種の実施を経て2年が経過し、現在はウィズコロナ、アフターコロナといわれる状況に変化してきている。この間、医療従事者は大きな影響を受け、とりわけ看護職が未知のウイルスに対する脅威にさらされながら、厳しい労働環境に置かれていることは誰もが知るところである。そして、臨地実習を学習の柱とする看護学教育は、各施設から臨地実習の見合わせの要請を受け、看護職を目指す看護学生の臨床での教育が困難な状況となった。看護基礎教育現場は、これまでに経験したことのない教育的危機状況となり、臨地実習に替わる代替実習を余儀なくされた。

文部科学省は、厚生労働省と共に令和2年2月28日および令和2年6月1日付事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」を发出し、学校養成所における実習等の授業の弾力的な取り扱いについて周知し、代替実習での単

位修得を臨地実習として認める方針(厚生労働省, 2020)を示した。つまり、学生たちは患者と関わることなしに臨地実習単位を修得したと解釈できるのである。この非常事態に対して、看護基礎教育に関わる教員達は、様々な創意工夫によって可能な限り教育効果を上げる努力をしており、これまでに代替実習に関連する教育実践報告(明野ら, 2021; 土岐ら, 2021; 篠原ら, 2020)がされている。また、代替実習を履修した看護学生の思いに関する実態調査研究も報告されており、学内実習やオンライン実習に対する経験不足や就職への不安(高岡ら, 2021; 栃原ら, 2021)、通常の学習ができない不全感(大沼ら, 2021)、看護師の役割や機能が理解できない(村岡ら, 2021)といったネガティブな思いが明らかにされ、そうした学生たちの孤独感、抑うつ傾向の実態(米田ら, 2021)も報告されている。さらに、Covid-19の感染対策期間中における学生のメンタルヘルスの重要性も示唆されている(久木原, 2020)。一方で、学内や遠隔実習であってもシミュレーション学習を駆使して教育目標が達成されたとする報告もある(土川ら, 2021; 渡邊ら, 2021)。これらの代替実習の実態調査や教育実践報

1 Toshiko TANIJI 千里金蘭大学 看護学部
2 Junko YAMAMOTO 千里金蘭大学 看護学部
3 Kazue TOKI 千里金蘭大学 看護学部・看護学研究科
4 Naomi YAMAMOTO 佛教大学 保健医療技術学部

受理日：2022年9月2日
査読付

告の多くは、さまざまな観点から今何が起きているかという現状を明らかにしようとする内容であった。

先行研究から、これまでに経験したことのない学習状況の中で学生も教員も試行錯誤を繰り返し、できる限りの学習環境を整えてきたことは間違いない。しかし、学生的心情は複雑であるといえる。特にコロナ禍の2年間に3年生と4年生を過ごしてきた学生たちは、基礎看護学実習での臨地実習が最後となり、それ以後はすべて、あるいは部分的に代替実習での学習を経て卒業することになる。本来、臨地実習の学習はそれまで積み上げてきた知識や技術を用いて対象者への実践を重ね、看護専門職としてのアイデンティティの形成や患者のリアルな体験世界を直接的に理解する場として、重要な学習機会である。また、統合実習の経験が就職後の看護実践や人間関係の構築などのキャリア形成に影響することも明らかになっている(小野, 2014)。そのため、臨地実習の経験が極端に少なくなったコロナ禍で看護基礎教育を終え卒業する学生たちが、自分達の学習経験をどのように意味づけ、卒業を控え今後何に思うのかといった観点から教育効果の実態を知る必要がある。

そこで本研究の目的は、コロナ禍において代替実習を経験して卒業する学生たちが、何を考え感じているのか、その思いを明らかにすることである。

II. 方法

1. 研究デザイン

本研究は、コロナ禍で代替実習を経験して卒業する状況に置かれた学生の思いを明らかにするために質的記述的研究デザインを採用した。

2. データ収集

1) データ収集期間

データ収集期間は、2021年8月～9月であった。

2) 研究対象者および選定方法

本研究の対象者は、近畿圏内の看護系大学において、2022年3月に卒業を予定し、代替実習を経験した看護学部4年生とした。

対象者は、2020年4月の緊急事態宣言以降、3年次の後期に7つの専門領域で患者との対面無しや見学のみでの臨地実習、紙面上患者による看護過程の展開やシミュレーションによる学内実習、4年次の6月～7月に総合実習で、臨地と学内を組

み合わせた実習を経験している。

対象者全員に、研究に関する説明を紙面と口頭で行い、インタビュー調査への協力を依頼した。後日、連絡があった対象者の都合の良い日時に再度研究の説明を行い、参加への意思を確認し承諾の得られた者にインタビューを実施した。

3) データ収集方法

データは、インタビューガイドを用いた半構造化面接法で収集し、「学内実習での学びや効果的だったこと」「卒業にあたっての思い」「就職することに対する思い」「就職先に希望すること」「就職するまでの自分なりの工夫」を自由に語ってもらった。面接の場所は、対象者が所属する施設の面談室や研究室の個室とした。面接回数は、1回であった。面接時の全ての語りは、同意を得た後、ICレコーダーに録音をした。

3. データ分析

初めに、録音データから逐語録を作成した。逐語録のローデータから、卒業前の思いが表現されている箇所を抽出した。次にその箇所の前後の文脈を考えて、コードを抽出し、意味の類似したコード同士を集めてサブカテゴリを生成した。その後共通性のあるものを集めて、抽象度をあげながらカテゴリを生成した。カテゴリの関係を図に整理した。

分析内容は、看護教育および質的研究に精通した研究者4名による討議を繰り返してカテゴリを確認し、信頼性を確保した。

4. 倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する機関の疫学研究倫理審査委員会の承認(K21-002)を得て実施した。

研究参加は、自由意思によること、同意後から研究データ公表までの中止はいつでも可能であること、匿名化後データを公表することについて説明し、同意書にて承諾を得た。また研究不参加により成績や就職について不利益を被ることは一切ないことを伝えた。取得したデータは匿名化し、個人が特定されないように配慮した。

III. 結果

1. 対象者の属性

対象者は、9名であった。全員が女性で、病院への就職が内定をしていた。面接時間は、平均31.1

分（最小25分～最大50分）であった。

2. 卒業する学生の思い

コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思いには、4カテゴリ、14サブカテゴリが抽出された（表）。

以下、カテゴリは《 》、サブカテゴリは〈 〉、対象者の実際の語りは「斜体（対象者A～I）」で示した。

1) 《不安と残念さ》

4つのサブカテゴリ〈看護技術の経験の少なさ〉〈患者とのコミュニケーションが身に付いていない〉〈先輩看護師等との関係形成への恐れ〉〈様々な対象者と関われなかった〉で構成された。

(1) 〈看護技術の経験の少なさ〉

「患者さんに看護のケアを実際にさせてもらえる機会がなかった (B)」 「働くにあたって一からやり直さないといけない (C)」 「他の世代と比べてできてない (E)」 「置いて行かれるような気がします。ケアの方面で… (H)」 など、代替実習により看護技術の経験が少なかったことを語っていた。

(2) 〈患者とのコミュニケーションが身に付いていない〉

「どういうふうにコミュニケーションを取っていったらいいのか (B)」 「ちゃんとコミュニケーションとれるのかな… (G)」 「患者さんとのコミュニケー

ション能力がまだ付いていない (I)」 など、患者とのコミュニケーションの取り方がわからず、能力が身に付いていないことを語っていた。

(3) 〈先輩看護師等との関係形成への恐れ〉

「看護師さんとの人間関係とかが…怖いな～、どんな言われるんだろう (A)」 「メンタル的なことも心配で、どういうふうに起き上がっていったらいいんだとか…怖い (B)」 「人間関係とかが結構気がかり…受け入れてもらえるんやろうか (E)」 など、看護師と関わる経験の不足から、就職後の先輩看護師等との関係形成への恐れに関連する内容を語っていた。

(4) 〈様々な対象者と関われなかった〉

「実習は手術(室)とかがちょっとだめだったんで、ほぼほぼ学内で、で、唯一臨地実習いけるはずだった教科も、途中でコロナが出て中止になってしまって、結局どこも行けずじまいって感じでした (E)」 「実際の患者さんにアセスメントして看護ケアを考えて提供するっていうのはもうちょっとやってみたかったかなと思います (E)」 「小児科に就職した場合、患児へのケアをしていないんで、想像もつかない (C)」 など、実習が途中で中止になり、様々な対象へ看護を実践できなかった残念な思いを語っていた。

2) 《揺らぎ》

2つのサブカテゴリ〈実践へのあやふやさ〉〈

表 コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思い

カテゴリ	サブカテゴリ	(対象者)
不安と残念さ	看護技術の経験の少なさ	(B,C,E,H)
	患者とのコミュニケーションが身に付いていない	(B,G,I)
	先輩看護師等との関係形成への恐れ	(A,B,E)
	様々な対象者と関われなかった	(C,E)
揺らぎ	実践へのあやふやさ	(B,D,H)
	自分へのわからなさ	(B,H,I)
できた感と強み	グループ学習で学びが深化する	(A,B,G,I)
	時間に追われず患者のデータと向き合う	(B,F,G)
	シミュレーションで患者・家族の思いに近づく	(C)
	コロナ禍を乗り越えてきたからこそ身に付いた力	(A,E)
自分を鼓舞する	私はやっていけそう	(D,F,H,I)
	私は何とかなる	(A,C,F)
	私は頑張りたい	(B,E,F,H)
	私達は特別でない	(C,D,E,F)

自分へのわからなさ>で構成された。

(1) <実践へのあやふやさ>

「計画立ててもそれが実際に出来ていないから、確認っていうか、経験していないから (B)」 「ジレンマというかわかりたいけどわからないっていう感情… (B)」 「(学内での)技術は…患者さんじゃないし、友達だし、…結局意味がないな〜って感じるし…これで良いのかな〜って思う (H)」 「本当に臨床に行っても自分で出来るのか (B)」 「実際患者さんにケアするとなると緊張するし、手順とかも飛んじゃうと思うし…実習で実際にケアできなかったの、それが出来るかな〜って (D)」 など、看護技術の実践や看護計画の展開ができず、患者への看護実践がわからないというジレンマ、自分は本当に臨床現場に出ているのかといった実践へのあやふやさを語っていた。

(2) <自分へのわからなさ>

「自分で苦手な面といったら技術面なので、実際の患者さんに看護のケアを実際にさせてもらえる機会がなかったので、そこをどうしていったらいいかわからない (B)」 「自分大丈夫かな〜って (H)」 「実際の場面で、自分がどうなるかわからない (D)」 など、自分自身の力量がわからず、実際の臨床現場でやっていけるのかといった自分へのわからなさを語っていた。

3) <できた感と強み>

4つのサブカテゴリ<グループ学習で学びが深化する><時間に追われず患者のデータと向き合う><シミュレーションで患者・家族の思いに近づく><コロナ禍を乗り越えてきたからこそ身に付いた力>で構成された。

(1) <グループ学習で学びが深化する>

「違う視点で考える必要性とか、新しい発見にもなりました (G)」 「話し合いながらやることによって、アセスメント力は磨かれた (A)」 「皆でわかるまで、皆で協力しながらわかっていくっていうか、ここはこうだからこうだねっていう感じで、皆で考える、考え方が高まった (B)」 「チーム力っていうかコミュニケーション力っていうのは、普通の実習よりは身に付いたんじゃないかなって思います… (臨床では、メンバーと) ガッツリ喋ることがないから、そういう面でよかったのかな〜っ

て、そういうのも大事じゃないですか、将来… (D)」 など、グループ学習により、コミュニケーション力が付き、価値観の違いや多角的視点を学ぶ中で、アセスメント力が磨かれ、学びが深化したことを語っていた。

(2) <時間に追われず患者のデータと向き合う>

「時間をかけてゆっくり、一つの事を考えることができた (B)」 「アセスメントとか看護計画の立案とかは、根拠を持って、時間もたくさんあったんで、調べることもできたんで、グループで一人の患者さんを受け持ったので他の人の意見も交えながらできたんで、基礎の時とかは全然違った根拠のあるものができたな〜っていうのはすごい思った (F)」 「学内にいたから看護展開の時間ももらって、学内だったから、家に帰って疲れているみたいなことがなくて、余力があったので、そのまま残って看護展開とかもできたんで。これまでだったら表面的だったものが、退院後の事考えられたりとか、患者さんの、紙の媒体ではあるんですけど、この人はこんな性格なんじゃないかとか考えて、患者さんの個別性みたいなものは考えて立てれたかなって…思います (G)」 など、時間をかけて情報と丁寧に向き合い、納得のいく看護計画の立案ができたことを語っていた。

(3) <シミュレーションで患者・家族の思いに近づく>

「患者さんの気持ちを考えた…患者役をしたからこそかなって思いがある (C)」 「家族の役割をすることで客観的に…家族の気持ちを考えることが出来た (C)」 など、患者や家族の役割をすることで対象の気持ちを考えることができたことを語っていた。

(4) <コロナ禍を乗り越えてきたからこそ身に付いた力>

「実際にいる患者さんと授業でする患者さんでは、既往歴とかも複雑だし、いろ〜んな背景があったりするから、実際にいる患者さんの方がややこしいから、それを実際の電子カルテで見ることができたので、その看護過程はできたかな〜って。情報を見極める力が必要だったし、そのこともできたので (A)」 「コロナ禍を乗り越えてきた強み。自分で考える力っていうのと、あとは自分から友達に話を聞くっていうか、コミュニケーショ

ンをとって、これどうしたらいいとか、そういうのはコロナ禍だからこそ親密になったって言ったらあれなんですけど、いつも以上に連絡とか取り合うようになったし、仲が深まったっていうのはあったかもしれないです。結局、自分から発信するか、誰かから来ないと、グループとかも全然動けなくなっちゃうんで、そういうふうに関わりから発信とかして、みんなと和気藹々とするみたいな感じで。自分から行動する力っていうのは付いたのかなと思います (E)」など、コロナ禍を乗り越えてきた強みとして、電子カルテから情報を見極める力、グループ学習から自分で考える力、自分から行動する力を、身に付いた力として語っていた。

4) <自分を鼓舞する>

4つのサブカテゴリ<私はやっていけそう><私は何とかなる><私は頑張りたい><私達は特別でない>で構成された。

(1) <私はやっていけそう>

「コミュニケーションに関しては、そんなに心配はない (F)」 「自分の考え方が合っているんやっていう確認もできた (F)」 「特に大きな不安とかはありません。やっていけそうだな〜って (D)」 「得意不得意な人とかもガッツリ関わったから、自分がどう対処したらいいかがわかった (I)」 「(総合実習で) 想像しながら実習できたんで、不安はありません (H)」 など、今後の卒業後についての思いを語っていた。

(2) <私は何とかなる>

「なんとかなるかなって。どの大学もみんな、同じ (A)」 「仕方ないよねって、感じで。不満に思っていることは全然ないってうか〜。なんとかなるかなって (A)」 「先輩看護師とのコミュニケーションは、何とかなると思う (C)」 「看護師さんとの関係は気にならない (F)」 など、皆同じ条件のため、何とかなるという思いを語っていた。

(3) <私は頑張りたい>

「何かする場合でも、イメトレというか自分がすることをイメージしておく、上手くいったりとか、そういうことがあると最近気づいたので、そういうことをイメージしながら日々生活していったり… (B)」 「ボランティアの方に自分から話しかけに行ったりとか、地域の活動に参加した

りとかして、いろんな世代の人と話したりとかは自分からしたりしています (E)」 「看護師として働く上で基本的な希望所属病棟の知識とかは、しっかり頭に入れておかないといけないので、その部分は、勉強しておかないといけないかな〜と思います (F)」 「(総合実習を終えて) 自分のキャリア形成とかで、師長さんやってみるのもええなとか、そういう将来を見出すことにはつながったかな (E)」 「実際私が働くとしたら、新人看護師という立場になるんで、リーダーはそんなとこ見ているから、私はこうしないとだめなんだな〜とか、客観的にみることができた (H)」 など、就職までに自分なりにやっておきたいことや将来像を見出しながら頑張りたいという思いを語っていた。

(4) <私達は特別でない>

「これは噂でしかないかもしれないですけど、コロナ世代って聞くじゃないですか。そういう感じで、なんか〜みたいな… (C)」 「(これまでの) 新人教育でしているような事をしてもらいたい (D)」 「知識面に関しては多分他の学年の方よりは多分実習とかでやってたと思うんですよ。だからそこは私たちの強みなんかと思う (E)」 「(先輩にしていたような、集合教育を) 同じようにして欲しい (F)」 と、コロナ世代と言われる特別視は、して欲しくないという思いを語っていた。

抽出された4つのカテゴリの関係について、図に示した。学生は、<不安と残念さ>を抱きながらも、<できた感と強み>にも目を向け、常に<揺らぎ>に影響されながら、2つの思いを行きしていた。そういった状況下でも学生は、<不安と残念さ>に留まることなく<できた感と強み>をもつことで、現実を受け入れ、自身に言い聞かせながら<自分を鼓舞する>ことに繋げていた。

IV. 考察

1. コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思い

看護職養成校の96.6%が実習施設からの受け入れ不可の連絡を受けているという日本看護系大学協議会の報告(2020)と同じように、本研究の参加者も、3年生の領域別実習から4年生の総合看護学実習まで、例年通りの臨地実習を経験することができなかった。

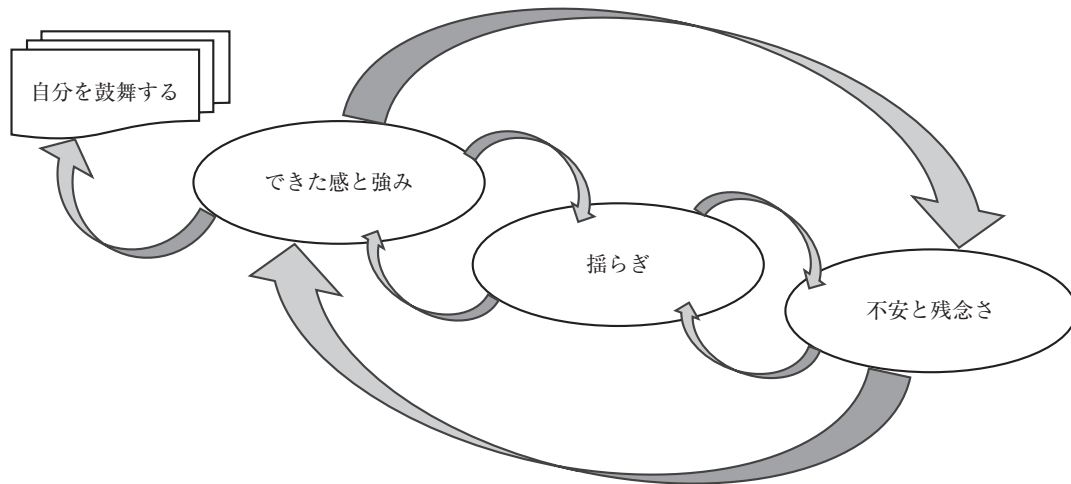


図 コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思い・カテゴリ間の関係

本研究では、＜看護技術の経験の少なさ＞＜患者とのコミュニケーションが身に付いていない＞＜先輩看護師等との関係形成への恐れ＞＜様々な対象者と関われなかった＞など臨地実習を体験できなかったことによる＜不安と残念さ＞が見いだされた。この思いは、先行研究で、代替実習を体験した看護系大学4年生の約6割がこのまま就職することに不安を抱えていること（柝原ら, 2021）、成人看護学実習で学内実習を経験して、看護師の不在、患者や看護の想像の難しさ、行った看護の妥当性が確認しづらいことで満足度が低下したこと（村岡ら, 2021）と同様の結果であるといえる。また学生は、不確かさの中で＜実践へのあやふやさ＞＜自分へのわからなさ＞という＜揺らぎ＞を表出していた。この＜揺らぎ＞は、在宅看護学実習で学内実習を経験し、訪問同行できない悔しさ、実習目標到達への心配、臨地実習不足で社会に出る不安といった、通常の実習ができなかった学生の不全感が報告（大沼, 2021）された内容と類似していた。臨地実習は、自身で看護技術を実践し、それまでに学習した知識や技術を統合する重要な学習機会の場である。その機会が奪われ、代替実習となり卒業する学生は、看護技術やコミュニケーション、入職後の先輩看護師との関係形成に不安を抱き、実践を経験していないことによるジレンマや本当に臨床現場でできるのかといった思いでいることが推測された。

一方、学生は、＜不安と残念さ＞と＜揺らぎ＞を行き来しながら＜グループ学習で学びが深化する＞＜時間に追われず患者のデータと向き合う＞＜シミュレーションで患者・家族の思いに近づく

＞＜コロナ禍を乗り越えてきたからこそ身に付いた力＞といったコロナ禍での代替実習の経験を意味づける＜できた感と強み＞についても語っていた。臨地実習では、学生が直面する問題として、実習記録の記述に必要な時間の遷延、疲労や大量課題による学習時間の確保困難があげられる（山下ら, 2018）。この時間の確保が難しい臨地実習に比べて、学内実習では、グループで1人の患者を受持ちゆっくりと時間をかけることができるため、情報を整理するアセスメント力が磨かれ、グループ学習で価値観の違いや多角的視点に気づき、学生が学びを深めることができたと推察される。また学生は、電子カルテから情報を見極める力、グループ学習から自分で考える力、自分から行動する力が身に付いた力として語っていた。これらの力が強みとなり、「（総合実習で）想像しながら実習できたんで、不安はありません（H）」と卒業に向けて、将来像を見出しながら頑張りたいという思いに繋がっていることが考えられた。

学生は、就職先に、代替実習を余儀なくされ臨地実習が経験できていないという状況への理解を期待しつつも、コロナ世代といわれる特別視はして欲しくないといった思いも抱いていた。そういった思いは、＜不安と残念さ＞＜揺らぎ＞といった逆境の中にあってもそこに留まらず今後どうあるべきかを思考し、自分達にも＜できた感と強み＞があり、卒業に向けて＜自分を鼓舞する＞といった学生に内在しているパワーを見いだしていた。

2. 継続教育への示唆

新人教育の努力義務化から、臨床現場では、所

属部署を離れて行う集合教育と、所属部署でプリセプターや上司からその病棟の特殊性に合わせた部署教育が実践されている。Covid-19流行以前における新人看護師の就職後1ヶ月、3ヶ月の困難には、「看護技術」「専門知識」「業務遂行」に関するものが多く（唐澤ら, 2008）、他にも「多様な患者との人間関係形成過程での緊張」「職場の人間関係形成過程・サポート体制へのとまどい・緊張」（永田ら, 2005）があげられている。これらの新人看護師の困難をサポートするために、必要な基本姿勢と態度、看護技術、医療安全や情報管理などの新人教育が行われている。

本研究の結果から、Covid-19感染拡大の中で教育を受けた新人看護師は、例えば、患者や看護師と対峙する対人関係能力は、これまで理解されてきた困難さではなく、その質やレベルが異なっている可能性がある。つまり、臨床現場は、これまで臨地実習で学生達が、当たり前を経験していた日常生活援助やコミュニケーション、患者・看護師との関係性の持ち方を養うことのできなかった、コロナ前までとは異なる背景をもつ新人看護師を迎え入れることとなる。

これまでの新人教育の看護技術は、診療の補助に関する内容（工藤ら, 2021; 西尾ら, 2012; 寺尾ら, 2010）が多く実施されているが、本研究の学生達の語る＜看護技術の経験の少なさ＞は、日常生活援助を中心とした看護技術である。臨床現場では、このような状態で入職した新人看護師に対し、リアリティショックの増大や医療安全上の課題を減らすことに研修時間を要することが予想される。しかし、本研究でコロナ禍により代替実習を余儀なくされた学生には、臨地実習の体験は不足していても、代替実習で学びを深化させ、自分自身を励まし認め、卒業や就職に向けて、一歩先に踏み出す準備を進めているというたくましさが見られた。そのため、継続教育を担う臨床現場には、代替実習を経験して卒業する彼らをコロナ世代と特別視することなく、身につけた能力をアセスメントし、弱い部分だけでなく、在学中に身に付いた力や強みにも着目して、十分に力を発揮できるような集合教育や部署教育の工夫や検討が望まれる。

V. 結論

コロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思いには、＜不安と残念さ＞＜揺らぎ＞といった

不安感や不全感を抱えながらも、＜できた感と強み＞から＜自分を鼓舞する＞が見いだされた。学生は、不安と残念さ、揺らぎを抱えながらもネガティブな思いとポジティブな思いが交差する中で、自分自身を励まし認め、卒業や就職に向けて、一歩先に踏み出す準備を進めていた。コロナ禍の影響を受けた学生を新人看護師として迎える臨床現場には、彼らを特別扱いすることなく、ポジティブな側面にも着目して、十分に力を発揮できるようなプログラムを整えることが期待される。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、調査対象が1施設に限定されていること、参加者数が少ないことから、結果を一般化することは難しい。また今回明らかにしたコロナ禍で代替実習を経験して卒業する学生の思いは、対象の一時点の思いしか把握できていない可能性があり、今後もコロナ禍による制約をうける代替実習は続くことが見込まれるため、参加者数を増やし継続的に思いを把握していく必要がある。

謝辞

本調査にご協力頂きました学生の皆様に感謝申し上げます。なお、本研究は千里金蘭大学奨励研究の助成を受けて実施した研究の一部である。また、EAFONS第25回国際会議（台湾）で本研究の一部を発表した。

文献

- 明野聖子, 田中裕子, 工藤禎子. (2021). 保健師養成における乳幼児と母親の支援に関するZoomを使用した学習プログラム令和3年度教育向上・改善プログラムの実施報告, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 28, 47-55.
- 唐澤由美子, 中村恵, 原田慶子, 太田規子, 大脇百合子, 千葉真弓. (2008). 就職後1ヶ月と3ヶ月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援, 長野県看護大学紀要, 10, 79-87.
- 厚生労働省. (2011, 2014). 新人研修ガイドライン, <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000-128o8-att/2r985200000128vp.pdf> (2022.8.23 閲覧)
- 厚生労働省. (2020). 新型コロナウイルス感染症の

- 発生に伴う看護師等養成所における臨地時実習の取扱い等について,
https://www.mext.go.jp/content/20200624mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2022.8.23閲覧)
- 工藤万由佳, 前田ひとみ. (2021). 新人看護師に対する採血技術の効果的な教育方法の検討:看護学生及び新人看護師に対する採血教育の文献レビューから,熊本大学医学部保健学科紀要, 17, 24-33.
- 久木原博子. (2020). 【新型コロナウイルス感染症関連】COVID-19流行期における大学生のメンタルヘルスに関する文献レビュー, キャリアと看護研究, 10 (1), 3-13.
- 村岡祐介, 館山光子, 井澤美樹子, 土屋陽子. (2021). 成人看護学実習における学生の実習満足度と課題COVID-19の影響による学内実習, 保健科学研究, (12), 1, 1-9.
- 永田美和子, 小山英子, 三木園生, 上星浩子. (2005). 新人看護師の看護実践上の困難の分析, 桐生短期大学紀要, 16, 31-36.
- 日本看護学校協議会共済会. (2020). 看護職養成校の新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大への対応に関する調査, https://www.e-kango.net/images/20210216_report.pdf (2022.8.23閲覧)
- 西尾亜理砂, 大津廣子. (2012). 新人看護職員研修における看護技術の「教えられ方」の現状と課題, 愛知県立大学看護学部紀要, 18, 31-38.
- 小野麻由子. (2014). 看護基礎教育修了時のキャリアビジョンに影響する統合実習の学び, 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要, 19, 35-43.
- 大沼由香, 星純子, 鹿野卓子. (2021). 新型コロナウイルスパンデミック期における在宅看護実習による学生の学び, 伝統医療看護連携研究, 2 (2), 65-73.
- 篠原幸恵, 讃井真理, 河野保子, 中島紀子, 羽藤典子, 永江真弓. (2020). 看護系大学のコロナ禍における基礎看護学実習 I の学内実習の実態と教育の質確保に関する検討, 健康生活と看護学研究, 3, 14-19.
- 高岡寿江, 石堂たまき, 藪下八重. (2021). 新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い, 佛教大学保健医療技術学部論集, 15, 55-68.
- 寺岡幸子, 宮腰由紀子, 高瀬美由紀, 小林敏生, 山本雅子, 川田綾子. (2010). 新卒看護師における看護実践技術力の入職後12カ月間の変化, 日本職業・災害医学会会誌, 58 (6), 294-300.
- 栃原由佳, 角智美. (2021). 新型コロナウイルス感染拡大下における看護系大学4年生の意識と職業的アイデンティティとの関連, 茨城県立病院医学雑誌, 38 (1), 39-48.
- 土岐弘美, 國方弘子, 多田羅光美. (2021). 自由に行動できない体験から創出した精神科看護支援:コロナ禍における精神看護学学内実習の一演習から, インターナショナルNursing Care Research, 20 (4), 59-71.
- 土川祥, 館下麻美, 井谷芙雪, 磯野みなみ, 宮武美佳, 中井抄子, 喜多伸幸, 立岡弓子, 花原恭子. (2021). 分娩介助シミュレーション実習の取り組みと助産診断過程の学習効果, 滋賀母性衛生学会誌, 20-21 (1), 31-37.
- 山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子. (2018). 看護学実習中の学生が直面する問題-学生の能動的学修の支援に向けて-, 看護教育学研究, 27 (1), 51-65.
- 米田龍大, 織田なおみ, 米田政葉, 高橋明日美, 大友芳恵. (2021). COVID-19流行下における登校禁止期間中の学生のイライラと関連要因に関する性別検討, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 17 (1), 85-89.
- 渡邊美和, 香川将大, 岡本佐智子. (2021). 【COVID-19と教育の新たな試み】COVID-19禍でのオリジナル教材を活用した成人看護学援助論I (急性期)の遠隔授業の取り組み, 東都大学紀要, 11 (1), 41-49.